

大乘

DAIJO 法話

眼差しの中



奈良・満誓寺衆徒
たけばやし しんご
竹林 真悟

私には四歳上の兄がいます。今も自慢の兄です。小学校からスポーツ万能で、アイスホッケーの同好会ではレギュラー。絵も上手で、体育館に貼られた絵には、入賞した印の金紙がキラキラ光っていました。マンガのキャラクターなどは、まるで透かしてなぞったかのように書きあげます。しかも優しくして面倒見がよく社交的。五年生から六年生の秋までの一年間、児童会長をつとめ、開校十周年の節目には記念行事の企画から実行までを全うしました。

会長としてステージ上で挨拶する兄を、私は大勢の子どもの中から、誇らしい思いで見上げていました。だけど、何でもできて、人にかわいがられる兄がいると、いいことばかりではありません。すぐ私と比較されるからです。夏休みに親戚の家へ行くと、兄は、いつでも遊べる私ではなく、年に一回くらいしか会えない年下のいとこと遊びます。だんだん不機嫌になっていく私を、叔父や叔母は「兄を取られて面白くないでしょ?」「お母さんが恋しいんで

しょ?」なんて冷やかしましたが、私の気持ちはぜんぜん違っていました。私が不機嫌だったのは、親戚やいとこの中に「バカでにいふ弟」というイメージが固定化されていくのを子ども心に感じていたからです。

「オレはそんなにバカじゃない。どんくさくない」と心の中で必死に否定していました。そして彼らの笑いが嘲笑に思えて、悔しくて仕方ありませんでした。

中高生の頃はそんな劣等感をひた隠しに隠しました。クラブ活動をしてバンドも組み、他のクラスの子とも仲良くし、オシャレにも気をつけ、行動的なイマドキの男子を演じていました。劣等感の塊だったからこそ、その後も知識で身を固めて他人を言い負かしたりしてきまし

た。成人してから縁あって、浄土真宗のみ教えに出会い、ご法話で「阿弥陀如来はそのままのあなたを救ってくださいます」と聞かせていただけでも、劣等感いっぱいの自分はなかなか好きにはなれませんでした。

数年前、久しぶりに里帰りしました。姉と兄のそれぞれの家族がみんなそろって、一緒に食事をした時のことです。お酒も楽しくまわってきた、子どもの頃の思い出話に花が咲きました。その中で、兄が中学校へ進学してすぐ、学校の許可をもらって朝刊の新聞配達のアアルバイトを始めた時の話になりました。当時、私は小学3年生。欲しかったおもちゃがあったので、兄の新聞配達を手伝っていました。

毎朝五時半に目覚ましが鳴り、兄に起こされ

て身支度をします。兄は自転車に乗って新聞店に向かいます。私は兄と待ち合わせる小さな電気店まで、二十分ぐらいの道のりを一人で歩きます。その間に兄は新聞店で配達する新聞を数え、自転車に積んで、私の待つ電気店まで自転車を走らせてきます。そして兄が「あそここの家」と指示しながら手渡してくれる新聞を、言われた通りに郵便受けに入れ、二人で約一時間かけて百三十軒ほどの家に配達しました。

話をしているうちに、あの頃の景色や思いが写真の束を手で繰るように浮かんできます。

後ろから見る兄の背中の大きさ。早朝のひんやりとした空気。新聞の匂い。二十分の道のりで、レアなキアゲハを追いかけてたり、道端の花の蜜を吸いながら歩きました。忘れていたいろ

んな景色がよみがえってきました。

「配達の途中で買ったジュースはおいしかったよね」「その自動販売機がくじ付きで、当たりが出たこともあったよね」と、あふれ出る記憶をたどっていくと、兄がこう続けたのです。

「店長からさ、まだ弟に手伝わせてるのか？手伝わせたらダメだって、毎回言われてさ。はい、わかりましたって返事するんだけど、お前が待ってると思って自転車飛ばしたらさ、あの長い道のりを歩いてきた小さなお前が、電気屋の軒下で体育座りしてオレが来るのをちゃんと待ってて……。よく一人で毎日歩いたよな。だから明日から来るなって言えなかったよ」

それは初めて聞かせてもらった話でした。まるで兄の視点で、あの電気店の軒下に座ってい



カット 長井多美栄

る幼い自分が見えたような気がしました。同時に、兄の温かい思いが伝わってきました。

大切な人を思う眼差しまなざしで私を見つめながら、阿弥陀さまが「そのままのあなたを救う」とおっしゃる。阿弥陀さまの眼差しの中には私の姿があるんだと思う時、どうしようもなくうれしくなります。

ひた隠しに隠した劣等感がある理由も、偽りいつわ演じ続けなければならなかったその理由も、全部ご存じの上での言葉にしか聞こえません。

嫌いな自分を許せるようになる心は、大切に思ってくれる存在からいただくものでした。そのお心をくださる方が「そのままのあなたを救う」とおっしゃることですから、何の疑いもありません。